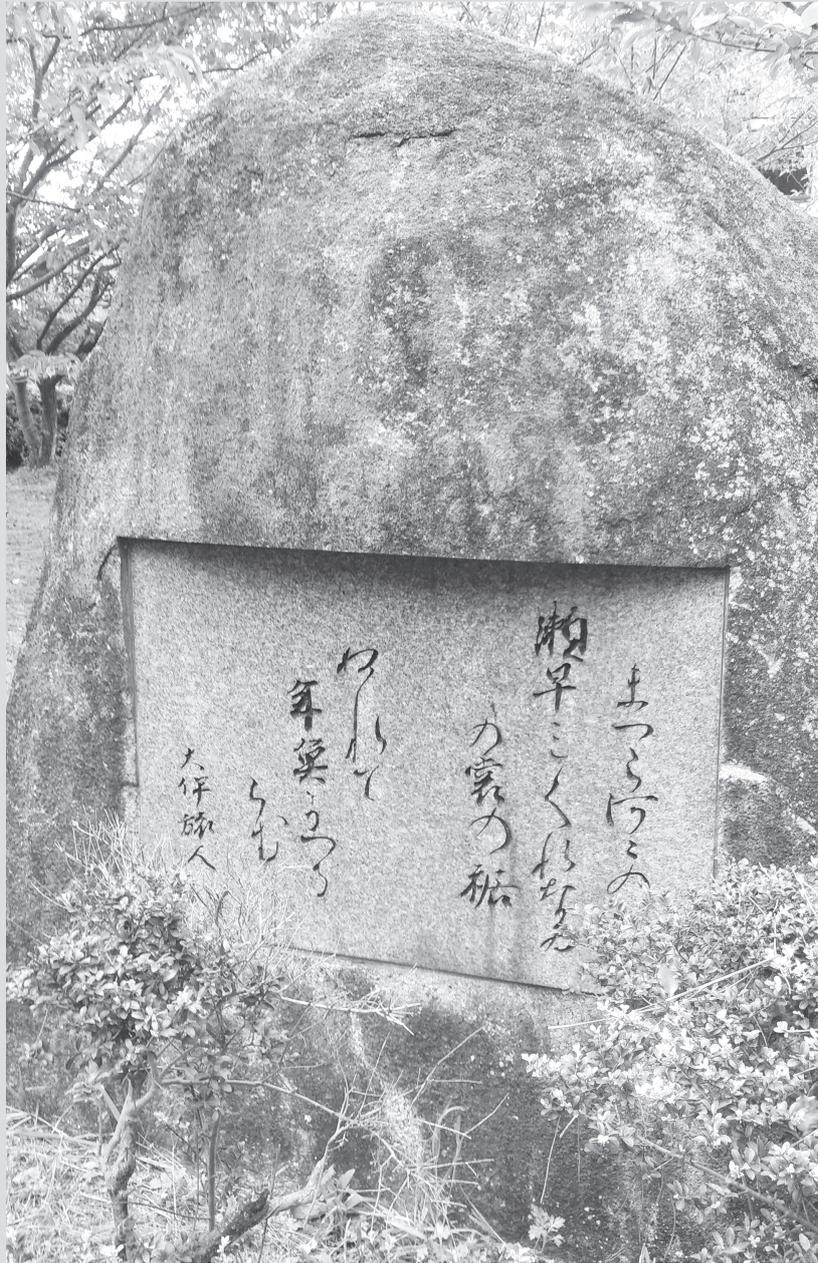


11 寺子屋ズカ

※題字／森川芳聲



唐津市浜玉町浜崎・万葉の里公園内

歌碑のこころ

まつら河 川の瀬早み くれなるの
裳の裾ぬれて 年魚かつらむ

松浦河の瀬の流れが早いので、紅の裳の裾を濡らして、鮎を釣っているのかなあ。

※詳しい解説は12頁に掲載しています。

もくじ

- 2 巻頭言 縄文時代を見直す…………… 山口 秀範
- 3 「社中」だより…………… 内山 慶子
- 4 「偉人レポート」…………… 吉田喜久子
- 6 あれこれ思うこと②…………… 古川 忠
- 7 良書案内…………… 廣木 寧
- 8 昨今の教育事情雑感④…………… 坂口 秀俊
- 9 信長、秀吉とバテレンの戦い②…………… 廣木 寧
- 10 TERAKOYAふおとればーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 歌碑のこころ(14) 編集余録 余録の余録

縄文時代を見直す

代表世話役 山口 秀範

どんな未来が来るのか

緊急事態宣言から半年経過しました。

私の周辺だけを振り返っても、それ以前には予想すらしなかった事態が今や日常になりつつあります。YouTubeで子供向け偉人伝配信、Zoomによるオンライン寺子屋の実施、小学生時代以来のマスク着用（しかも常時）・・・、この間上京は一回のみです。

ウイルスの実態が次第に明らかになるにつれ、大感染への危惧は薄らぎつつありますが、寒さに向かうこれから勿論警戒を怠る訳には行きません。

マスコミは十年一日の如く新規感染者数を報じ（より重要な数字は、医療崩壊に直結する要入院加療の重傷患者数ではないか）引き続きの警戒を呼びかけますが、長期的な見通し、所謂「アフターコロナ」の姿を示すまでは手が回っていません。

また今回のパンデミックとは別に、AI（人工知能）の高度化により人間を凌駕する（シンギュラリティと呼ばれる到達点）日が近づき、二〇四五年がその年だとも囁かれています。

いずれにしても従来の延長線では対応不能な未来にどう立ち向かうべきかが問

われます。

手がかりは歴史に学ぶこと

人類の長い歩みの中で、未来の予測は誰しもが抱く叶わぬ願望でした。二十世紀最大の知性とも称されるポール・ヴァレリーの名言「湖に浮かべたボートをこぐように、人は後ろ向きに未来へ入っていく。目に映るのは過去の風景ばかり、明日の景色は誰も知らない」を引くまでもなく、未知の明日に備える手立ては、昨日までたどって来た過去、即ち歴史に学ぶことです。

『日本書紀』には、第十代崇神天皇治世下に疫病が蔓延して民の半数が死亡した後、大物主神を敬い祭ったとの記述があります。福岡の歓楽街中洲では感染防止の自粛が続いて閑散していますが、博多川沿いに建つ飢人地蔵は、享保の飢饉で人口の三分の一を喪った供養を今も毎年継承しています。

どちらの場合も自分たちの無力を痛感し神仏に頼ることによって克服しようとするのでしよう。二十一世紀の現代も、人間の利己心や傲慢さを顧みる絶好の機会と捉えて、生活習慣を見直すことから始めたいものです。

縄文ルネサンス

もつと大きく時代の転換という観点で我が国の歴史を振り返ると、祖先たちが遭遇した最初の大変革は縄文時代から弥生時代への移行だったでしょう。

最近縄文時代が脚光を浴びています。半世紀前の日本史では、弥生以前は未開の貧しい縄文人が住む原始時代で、五千年前に起こった世界の四大文明には旧さもレベルも遠く及ばないと教わりました。

ところが、一九九四年の三内丸山遺跡発掘を代表とする数々の新発見によって、縄文のイメージは一変しました。今では、一万六千五百年前に始まり一万年以上に亘って狩猟、漁労、採集によって集落を作り、安定的な生活を実現した「持続可能な自然共生社会」と評価され、縄文土器は「世界最古の土器」と呼ばれています。

次第に定住が進んだ村の祭礼場や墓地の配置などから、縄文人の精神文化も解明されています。中でも特筆すべきは、殺し合いの形跡が見つからないという点です。文字は持たなかったが、豊穡と生殖を象徴する土偶を輩出した人々は、殊更に階層を作らず平和な生活を継承して来たようです。

弥生時代の受容に倣おう

弥生時代の始まりも従来より早まり、今から三千年前と修正されました。その

頃既に九州での水田稲作が確認されたからです。朝鮮半島からの渡来人が、縄文人を駆逐して稲作を広めたという「定説」は根拠を失い、それ以前から陸稲栽培を採り入れていた縄文人が、一気に水田を選択した時期からを弥生時代と呼ぶようになりました。

稲作による食料増産は人口増をもたらすが、やがて大和朝廷の設立へと導くのですが、同時に集団作業を進めるためのリーダーを必要とし次第に社会の階層化を生むこととなります。そして遂には主導権争いや他の村との領地争奪などの戦闘が発生し始めます。

ここで注目すべきは、文明化の負の面を嫌って特に東日本の村々は相当期間農耕稲作を受け付けなかったことが遺跡調査から判明しています。一方葬送のしきたりや生活様式で弥生時代以降まで引き継がれたものも多いのです。つまり縄文が弥生に取って代わられたのではなく、流入した新文明を取捨選択しながら受容した「先人の知恵」が浮き彫りになって来ました。一万年かけて醸成した国民性は飛鳥時代の仏教受容や明治期の西欧化でも絶妙に発揮され、独特の情緒・感性は私たちにも宿っています。

「超高度情報化社会」とでも名づけるべき近未来を生き抜く心構えを、私たちの遠い祖先たちが示してくれているようです。縄文のDNAを信じつつ、臆することなく「明日の景色」を待ちましよう。